

		第1回検討委員会で出された意見と会議後に提出された意見	現在の取組状況、今後の取組予定
1	機会の提供	きっかけづくり 小・中・高と進むにつれて次第に読書するゆとりがなくなっていく中で、読書時間を増やしていくためには、本を好きになるきっかけづくりが大切である。	・小1・中1・高1向けにパンフレットを作成し、夏休み前に市内全校の各1年生に配布し、仙台市図書館の利用を促すとともに、お勧めの本やCDなどの紹介を行っている。
		本を読むことで本やポイントなどがもらえたり、同年代の本の感想を読むことが読書のきっかけとなる。	・仙台市図書館各館のYAコーナーにお勧め本を募集する箱を置き、記入いただいた紹介を仙台市図書館ホームページのYAのページに掲載している。また、職場体験をした中学生にお勧め本の紹介を記入してもらい、YAコーナーに掲示している図書館もある。
		家庭の読書環境について、働きかけは今後もちろん重要だが、読まない中学生の家庭に読書推進の重要性、有効性を働きかけるのは難しいのが現実である。家庭の状況によっては、学校において読書推進を積極的に行うことが子どもや保護者の負担になることも考えられる。子ども自身に読書の喜びや効能を感じさせるためには、教員が読書の必要性を理解し、子どもに本を読む機会を提供するような教育課程内での取組みが優先課題ではないか。	・ほとんどの小中学校が「朝読書」の時間を設けている。学校によっては協働型学校評価の重点目標に「読書」を掲げ、家庭での読書を推奨したり、地域から読み聞かせのボランティアをよんだりしている。 ・仙台市図書館では、朝読パックの貸出を実施している。
	授業からの発展学習で、本を読むようなシステムづくりの検討が必要。	・小学校国語では、学んだことから興味を持った分野の読書を勧める時間もある。 ・仙台市図書館では学校貸出により、教科に関連する本を貸出している。	
2	家庭	子どもにあった本が家庭にない場合もある。家で読書する習慣をつけるためには、家庭における読書環境の整備も大切。	・乳幼児向けパンフレット「あかちゃんと楽しむ はじめての絵本」や保育所だより、小1・中1・高1向けパンフレットなどお勧めの本の紹介したり、子ども向け本の紹介として「BOOK TREE」を年4回発行している。
		マスメディアのデジタルコンテンツに慣れている時代の子どもたちに、活字の面白さを知ってもらうことが大切。そのきっかけづくりとしては、学校、図書館だけでなく、家庭での取組みも必要。保護者の協力が必要となるが、子どもと一緒に保護者も本も読むことでそのきっかけづくりになるのではないか。	・「家読」(うちどく)や「ノーテレビ・ノーゲーム」の取組みを検討する。
	親も子ども本をすぐ手に取れるような環境を整備することが大事。	・泉図書館(子供図書室)では、児童書コーナーに子育て関連本も配架し、一緒に選べるようにしている。	
	学校図書館の環境が、子ども達がいてみたいと思える魅力ある図書館になっているといい。話題の本の紹介をしたり、本の並べ方を工夫するなど。	・新刊書や教科書で取り上げられている本、話題の本など、それぞれの学校でテーマを考えて、本の紹介をしている。また、平積みではなくブックスタンドを利用する等並べ方の工夫も行っている。 ・学校図書館運営・授業実践の優れた事例を各研修会等で紹介している。	
学校図書館	学校図書館を学習・情報センターとして整備するため、児童生徒が調べ学習に使えるコンピュータ設置を検討してほしい。図書館での授業・図書資料とICTの併用は進んでいない状況であり、図書館の環境整備は課題となっている。	・コンピュータ等の導入については、整理すべきことも多く今後の検討課題である。	
	学校図書館法が改正となり「学校司書を置く努力をすること」となったが、「図書事務員」の役割を今後どのようにしていくのか、授業への関わり方を含めたスキルアップをどうしていくのかも検討すべき。また、司書教諭以外の先生方にこそ研修の機会が必要ではないか。仙台市教育研究会学校図書館部会、図書事務員研修会では「新 学校図書館 今すぐ使えるガイドブック」をテキストとして研究会を行う予定。	・今年度から研修の機会を増やし、「司書教諭と学校図書事務員に期待される役割と実務」について全国での取組事例等を参考にしながら、司書教諭と図書事務員と一緒に学ぶ研修を8月に実施予定としている。	
	学校図書室開放について、土日開放できる学校の拡大は難しくても、長期休業中の図書室開放を地域に拡大することが可能かもしれない。在校生だけでなく、未就学児や卒業児童生徒、保護者への貸し出し、ボランティアによる図書館関連イベントの開催等。中学生から「小学校で本を借りたい」と言われたことがある。	・学校図書室開放については、現在実施日を土曜日に限定している。長期休業期間の実施拡大や対象者の拡大については、各校の状況やニーズの把握に努めながら、その可能性を検討していきたい。	

		第1回検討委員会で出された意見と会議後に提出された意見	現在の取組状況、今後の取組予定
2	地域の 人材 育成	<p>読み聞かせなどは子どもが読書をするきっかけとなるため、読み聞かせなどを行う人材の育成も必要。地域の方から、子どもたちに何かをしてやりたいが、読み聞かせの講座はないかとの問い合わせを受けたこともある。</p> <p>ボランティア自身の負担が大きい状況もあるため、ボランティアへの支援強化も必要。また、スキルアップのために公共図書館職員から専門性を生かした指導を受けたいというボランティアの希望があってもなかなか対応できないという状況もある。</p>	<p>・仙台市図書館では、毎年「読み聞かせボランティア養成講座」を開催し、担い手の育成を図っている。例年受講希望者が多いため、今年度は開催回数を増やしたが、受講しただけに終わらず、実際に活動に結び付くよう読み聞かせグループの紹介や体験場所の斡旋などにも取り組んでいる。</p> <p>・各地区市民センターにおいても、読み聞かせ等のボランティア養成講座を実施している。(平成27年度は6講座)</p> <p>・市民センターの図書ボランティアについては、生涯学習支援センターにおいてスキルアップ研修会を実施している。</p> <p>・ボランティアの方が地域で無理なく活動できるように、ボランティアのすそ野を広げていく取組みや仕組みを検討していきたい。</p>
	環境の 整備・ 充実	<p>より活用しやすい公共図書館による学校支援が必要。教員が各教科の授業の中で図書館や図書資料を活用できる環境づくりのため、授業で活用できる複本の準備等を公共図書館のサービスとして期待したい。</p> <p>学校図書館に対する配送システムの検討はぜひしてほしい。学校間の相互貸借を含むのか、公共図書館と学校間に留めるのか実施範囲の検討も必要。学校間の相互貸借が可能になれば可能性はより広がる。また、どの機関がその機能を担うのかも検討が必要。</p>	<p>・すべての教科についてすぐに対応していくのは難しいが、要望の多いものなどは積極的に購入するなどの取組みは毎年実施している。今後も学校の要望にできるだけ細やかに対応できるよう資料充実に努めたい。</p> <p>・公共図書館で学校が借りた本を返却する際の配送システム構築については、現在の状況や問題点を整理していく。</p>
	公共 図書館	<p>図書館職員のブックトークについては一層のスキルアップが必要との声もある。現場を知り子どもが主体的に本をとるきっかけを作るという目的に沿ったトーク、かつ教員の手本となるトークの実現のための取組みを行ってほしい。</p>	<p>・図書館職員がブックトークで学校訪問を行った際の現場との情報交換を積極的に行い、同時に職員の研修方法の工夫なども検討していく。</p>
	学校 教育	<p>学校ではタブレットでの電子書籍の利用も考えられるが、今後学校においてタブレットがどこまで広がるのかにより電子書籍に対する対応も変わるのではないかと。</p> <p>アクティブラーニングと図書館の関連についても第三次計画において記載が必要。</p>	<p>・タブレット導入については現在検討しているところである。</p> <p>・記載について検討していく。</p>

		第1回検討委員会で出された意見と会議後に提出された意見	現在の取組状況、今後の取組予定
3	親・家庭への啓発	家庭の読書環境の整備のためには、親の意識を変えていくことが必要。	・保育所では、入所している子どもの保護者に対しては、懇談会や保育所のおたより等を通して、年齢に合った絵本の紹介や子どもに人気がある絵本、新刊絵本の紹介などを行っているところもある。絵本の単価が高いということもあるので、絵本の貸し出しなどを通して、家庭でも親子で絵本に親しむ機会が持てるようにしている。また、地域の子どもに対しても貸し出しを行っている。
		胎児・乳児から本に親しむためのブックスタート	・市民図書館にてパンフレット「あかちゃんと楽しむ はじめての絵本」を作成し、保育所や乳幼児検診の際などに取りやすい場所に配置するなどして配布している。毎年度更新のうえ配布する。
		親が読書活動を促進するようわかりやすいキャッチフレーズで啓発することも有効ではないか。(「お子さんの誕生日には、本をプレゼントしよう」、「パパ・ママが読んだ本をプレゼント☆」等)	・わかりやすいキャッチフレーズは理解促進に有効であると考えられるため、今後検討していく。
理解の促進	学校での取組・職員の理解促進	乳幼児・未就学児と保護者に対する働きかけは成果が上がってきているかと思われるが、小学校での働きかけはどうか。	・全小学1年生に小1パンフ「としょかんへいこう!」を配布している。
		中学生とともに小学校高学年も読書活動の推進に対策が必要。管理職に図書館教育への理解が広がらないと、担任レベル、全職員で意識して取り組むということにつながらないため、管理職の意識改革に向けての働きかけが重要。また、数値目標は、一般の教員や家庭にあまり認識されていないと考えられるため、学校において担当レベルまで知らせ、指導してもらうことが必要。	・新しい時代が求める学校図書館の役割について考える研修を10月に教育センターにて実施予定としている。演題は「アクティブ・ラーニングを支援する学校図書館と情報読書」。 ・管理職の図書館教育への理解は広がっていると考えられる。担当レベルにその意識をひろげていくためには、優れた実践から学べるようなボトムアップが望まれる。 ・数値目標については、各学年における貸出冊数の報告を受けるとともに数値目標を示している。各学校の担当レベルへの周知を推進するよう管理者の意識向上を図っていきたい。
		学校図書館運営・授業実践の優れた事例の紹介はどの程度実施されているのか。事例紹介が司書教諭レベルで留まっているのではなく、朝読書や授業での図書館活用など、校長先生・教頭先生レベルにも理解を深めていただき、校内での取組みを強化することが望まれる。	・活動実践が顕著な学校を各研修会等で紹介している。
4	連携・協力	ホームページの更新・内容の検討。	・より効果的な広報ツールとなるようにホームページの内容等について検討していく。
		電子書籍については「検討する」とするべきではないか。情報教育からは「ノーゲーム・ノースマホ」も話題となっており、情報教育関係機関とも連携し、検討する必要があるのではないか。	・電子書籍については、現段階では情報収集等が必要な状況であり、今後の取扱について検討していきたい。
		仙台市図書館担当者と学校代表で情報交換をして、それをどのように多くの学校に広めるのか、情報共有の仕方も検討が必要。仙台市教育研究会と連携強化することで情報共有が図られる可能性があるのではないか。	・研修会の他、仙台市教育研究会と連携を深めることで、学校図書館、公立図書館の利用等について情報共有を図り、学校への取組みを強化するよう努めたい。
		図書館、学校、家庭がそれぞれ独立して読書活動をしなくても成果が上がらない部分がある。今後どのように連携していくべきかを検討していくことが必要。	・子ども向けの図書館行事は多いが、大人向けの行事は少ない。今の親世代は映像メディアが主で育った世代でもあり、本の魅力を知っている人が少ないのかもしれない。三者連携のためには、大人にこそ本の魅力を知ってもらうことが必要であるため、理解促進、環境整備を通し、連携強化に努めていきたい。